内外交差点

ラクガキが変えた街の見え方
デザインという名の冒険①

成川　史華氏　（扇交通社長）　第9／12回

旅というのは不思議なもので、空港を一歩出た瞬間に、街の匂いも、光の色も、人の歩き方さえも変わって見える。海外を歩いていると、「ああ、私は今この街の言葉を話せないんだ」と実感する場面が何度もあった。そんな時でも、デザインがそっと背中を押してくれる。トイレのマークも、バスの絵も、空港の導線も…言葉よりも先に、「大丈夫、こっちだよ」と教えてくれる。分かりやすさは、旅人にとって立派な安全装置だ。

その感覚を改めて思い出したのが、兵タ協神戸・阪神間支部のサービスセンター委員会だった。老朽化したタクシー乗り場の標柱をどう更新するかという議題があり、デザインを含めて議論することがあった。その会議の資料に小さなラクガキを描いたら、それが一部に採用されたという、ちょっとした笑い話のような出来事がある。今振り返ると、そのラクガキが呼び水になって、タクシーの“見え方”がほんの少し変わったのだから、街の景色は案外、紙の上から変わるものなのかもしれない。

当時、神戸・阪神間の乗り場標柱は「タクシー乗り場」と日本語が載っているだけで、外国人にはもちろん、小さな子どもにとっても一瞬では理解しづらいものだった。委員会では、国交省が示しているタクシーのピクトグラムを採用することで決まったのだが、私にはどこか硬くて、街の空気にきれいに溶け込む気がしなかった。タクシーはもっと柔らかくて、生活の中に当たり前にある乗り物だ。もっと“生活感のあるマーク”、言ってしまえば“かわいいタクシー”でもいいのではないか――そんなことを思いつつ、資料のスミに落書きをして周りに見せてみたところ、意外と好評で正式採用にこそ至らなかったものの、部分的にデザインが採用されることになったのだ。最終的に私のデザインした標柱は学校の近くにある乗り場に、それ以外は国交省のものに変わっていくことになった。ウチの娘が「このタクシー、かわいい」と言ってくれた時は、少し胸が温かくなった。神戸に来た際には、是非、探してみてほしい。

この“かわいさ”は、思わぬ方向へ広がりを見せる。標柱のデザインをステッカー化し、タクシーを「こども110番」として生かせるのではないかというアイデアに派生していくことになる。タクシーは、街の隅々を昼夜問わず走り回る稀有な公共交通だ。もし子どもが危険を感じた時、安心して飛び込める存在になれたら、どれほど心強いだろう。街に散らばった小さな“避難所”のようなイメージだ。私はデザインの専門家ではないが、海外を旅してきた目には、街のサインが人に与える安心感や温度が、どうしても無視できないものとして映る。文字は読めなくても、色や形は読める。タクシーのマークひとつで、人は迷わずにすむ。旅先で何度も助けられたその感覚を、自分の暮らす街でも実現したかった。要は“伝わる形を選ぶ”ということだ。

一方で、タクシーにはもっと広い意味がある。移動手段でありながら、24時間街の空気を誰よりも吸い込み、道路の行き止まりさえ熟知している。ドライブレコーダーは走るたびに街を記録し、夜道に浮かぶ車体は、時に防犯灯のような役割も果たす。地域の安心を支える存在として、まだまだ活用できる余白があるはずだ。

タクシーという乗り物は、とても“人間的”だ。流しのタクシーがふらりと現れたときの安心感、深夜の帰り道で感じるほっとした気持ち、観光地で道に迷った時の救われたような感覚――それらはすべて、人と街と車の間に流れる目に見えない関係だ。だからこそ、その入口となる標柱やアイコンが、ひと目で理解できて、どこかやさしい雰囲気をまとっていることには意味がある。

私はこれから業界の中でどれほど関われるかは分からない。けれど、会議の片隅で描いたラクガキが街のどこかで掲げられているように、タクシーの未来は案外、小さな線一本から変わるのかもしれない。それが旅人にも、子どもにも、そして街で暮らす誰かにとっての“安心の目印”になるなら、デザインとは、なんと素晴らしいものだろう。